

クリアな音質、編曲提案も

個性や意外性の付与に課題

京都大白眉センターの中村栄太
特定助教―京都市左京区で



Iを活用する動きが広がっている。専門家に現状と課題を聞いた。

英国のロックバンド、ピートルズとして「最後の曲」が、人工知能(AI)の技術を使って完成したというニュースが流れた。故ジョーン・レノンが残した音源から歌声を抽出するという。ピートルズの試みだけでなく、音楽制作の現場ではA

英BBC電子版によると、6月13日のラジオ番組で、メンバーだったポール・マッカートニーさんが「最後の曲を完成させたと明らかにした。曲名は明言しなかったが、ジョン・レノンが亡くなる2年前の1978年に作曲した「ナウ・アンド・ゼン」である可能性が高い。ポール」と書かれたカセットテープに収録されたデモ音源の1曲で、AIの技術により雑音や楽器の音を切り離し、声だけを取り出したという。「音源分離の技術を使っ

たのではないかと、音楽情報処理を研究する関西学院大の片寄晴弘教授(59)は推測する。音源分離とは、ある音源から特定の音だけを取り出す技術のこと。過去の映画作品から雑音を除き、音質をクリアにする使い方もある。

さらに、人間の脳の仕組みを模した「深層学習(ディープラーニング)」で発展し、音声分離するだけでなく、合成も可能になった。AIに歌手のデータを与えて声質を学ばせ、別の人の歌声に置き換えることもできる。片寄教授によると、NHK紅白歌合戦で披露された「AI美空ひばり」や、松任谷由実さんと「AI荒井由実」のデュエットでも使われたという。

音楽用のAIは他に、音源を入力すると自動で楽譜を書き起こすものや、編曲のアイデアを提案するようなものもある。自動作曲にも用いられ、多くの楽器の音で1曲丸ごと作れるだけでなく、演奏に表情をもたせることもできる。歌詞や曲のイメージを言葉で入力するだけで作曲できるサー

ビスも登場しているが「ヒットチャートをにぎわせるのは、まだ先だろう」と片寄教授はみる。

音楽に限らず創作物は、個性や意外性が求められる。深層学習は大量のデータから共通のパターンを探るのに適しているため、平均的なものに落ち着きがちだ。特定の音楽家のデータだけを与えても、学習量が限られてしまい既視感が出る。

AIが人間を感動させる作品を作るのは、簡単な道のりではない。音楽創作での知能情報学を研究する京都大白眉センターの中村栄太特定助教(39)は「人間には人生経験があり、趣向はいろいろな要素が重なって形成される」と指摘する。

中村特定助教は、違つ角度からもアプローチしている。20世紀以降のクラシック音楽や日本の大衆音楽の音源や楽譜をAIに読み込ませて自動作曲させている。できあがる曲の変化によって、音楽スタイルの変遷が分かるという。「人間

も先人の知恵から学び、新しいものを生み出してきた。ある音楽家がどの音楽家から影響を受けて、どんな新しい要素を付け加えたかを考える」と説明する。

自動作曲が成熟すると、聴き手の立場を一変させる可能性がある。作られたものの中から好きな曲を選ぶだけでなく、自分のための音楽を作るようになるかもしれない。「大衆受けはAIが狙い、人間はそこから解き放たれて多様な音楽を生むかもしれない。また、音楽を作るために、聴くプロが重要視される時代が来るかも」と中村特定助教は考える。

方向性を決めて、後は機械に委ねるわけだが、現在と変わらない面があると片寄教授はみる。大衆音楽の世界では複数の専門家がチームを組み、楽曲を制作することは珍しくない。AIのサポートを受けることで「すべてが個人レベルで行えるようになる。ただ、最後に求められるのは作り手の審美眼」というのは、まだまだ創作の肝のようだ。

【山脇新一郎、写真も】